

大谷ロスの後で

まもなく3年に達するコロナ禍、核のリスクすら取り沙汰されるウクライナ戦争、異常気象、格差の拡大、人口減少、物価の急上昇。そんな不透明な時代にあっても、MLBエンゼルスの大谷翔平選手の連日の活躍は、多くのニッポン国民には一服の清涼剤となったのではなかったでしょうか。そんな大谷選手も、先月の6日のアスレチックス戦でも好投し、メジャー史上初となる規定投球回&規定打席に到達したところで、今季を終えました。ポストシーズン(リーグ優勝決定シリーズ⇒ワールドシリーズ)入りを逃したエンゼルスのゲームは終了となり、「今日から始まる大谷ロス。来年の開幕まで長いな…」「明日から見るができない。何を楽しみに朝を迎えれば



いいのだろう…」「これから半年大谷ロスどうしよう…」など、早くも“大谷ロス”を嘆く声がインターネットでも拡散されています。大谷ファンにしてみれば、大谷選手抜きポストシーズンは、勝ち上がった強力チームの死闘ゲームも、消化試合のようにすら思えるほどに、大谷ロスは深刻です。(私の目から見て)ポストシーズンに残った大リーガーの投打のパフォーマンスを見ても、大谷の別格のすごさが再認識されます。ところで、NPB(日本のプロ野球界)での若手選手の活躍ぶり、中でもヤクルトスワローズの56本のホームランで王選手を超えた村上宗隆などの超有望選手の登場…また、JGA(日本のゴルフ界)においても、第1回大会(1927年)の赤星六郎氏以来となる95年ぶりのアマチュアとして「日本オープン」制覇した蟬川泰果(せみかわ・たいが/東北福祉大4年)など、本家タイガーウッズを超えそうな若手が続々登場しています。

早く日本の多くの分野で若手の台頭と活躍により、“何かと元気のないニッポン”から抜け出してほしいと願っています。

さて、週刊新潮10月27日号に「知られざる英雄」なる写真報道がありました。その「英雄」こそ、先月の向日葵だより第301号「歴史に学ぶで(占守島の戦い)」の中では触れませんでした。全軍を指揮した北海道・樺太・千島を管轄する第5方面軍司令官樋口中将です。その「英雄」の銅像が完成し、除幕式が10月11日淡路島の伊弉諾神宮で行われたというものです。「占守島で戦わなければ、北海道は今のウクライナのように蹂躪され、ロシア領にされていたはず」だったこと等は先月号でお伝えしたとおりですが、樋口中将は軍人でありながら、ナチスの迫害からシベリア鉄道で満州に逃れてきたユダヤ人2万人の命を救った「英雄」でもあったのでした(旧リトアニア領事代理・外交官の杉原千敏のケースと比べ、一般にはあまり知られてない...)。戦後初となる軍服姿の軍人の全身像が建立されるに至った経緯は、歴史を学ぶことで十分納得できるのではないのでしょうか...



樋口季一郎像